

令和元年6月6日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03996

研究課題名(和文) 精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究

研究課題名(英文) Establishment of a System to Promote Socio-Education Focusing on Narrative Stories from Those with Mental Disorders

研究代表者

栄 セツコ (SAKAE, Setsuko)

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：40319596

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：子どもたちの生きる力の育成と当事者の病いの語りに対する価値の再認識の必要性を背景として、本研究の目的は「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育」のプログラムの開発とその普及に向けたシステム構築にある。方法は、当該実践の好事例と判断した実施主体の異なる5つの団体や組織を対象として参与観察を行った。その結果、「共生社会の実現」を長期目標とする福祉教育のロジックモデルを提示した。その際、当事者はリカバリーの物語と共生社会を願うメッセージを語っていた。また、プログラムの普及に対して、信頼関係を基盤とした結束型と関心がある同志がつながる架橋型のシステム構築を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の精神的不調を呈する子どもたちの増加を背景に、子どもたちの生きる力の育成を目指した福祉教育の必要性が高まっている。その一方で、精神障害は可視化することが難しく、福祉教育の教授方法がわからないという教職員の意見が聞かれる。加えて、多様性を認めた共生社会を目指すには、当事者参画型の福祉教育実践活動が求められている。そこで、本研究の社会的意義は、子どもたちの教育的効果を目指した精神保健福祉教育プログラム、共生社会を長期的成果としたロジックモデル、当事者参画型の福祉教育プログラムの普及方法を示した点にある。

研究成果の概要(英文)：Background：Necessity of developing children's capacity to live and rediscovering the value of narrative stories about illness from those with mental disorders. Purpose：This study aims to establish a system that helps develop and promote socio-education programs focusing on narrative stories from those with mental disorders. Method：Participant observation was conducted targeting five different organizations and groups engaged in implementing relevant socio-education that I considered to be good practices. Result：I presented a logic model for socio-education aimed at realizing an inclusive society as a long-term goal. In narrative stories from those with mental disorders, they talked about their recovery from illness and their message of hope in realizing an inclusive society. I suggested the establishment of two systems: a bond-type system based on a relationship of trust, and a bridge-type system in which people with the same interests are connected to each other.

研究分野：社会福祉

キーワード：精神障害者 病いの語り 福祉教育 地域共生社会 ロジックモデル ネットワーク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究」をタイトルとする実践的研究であり、究極的な目標は「多様性を認め合う地域共生社会の実現」にある。このような研究テーマを設定した背景には、以下の2点がある。

(1) 精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムの必要性

近年、精神障害をもつ当事者（以下、当事者）による病いの経験に基づく語りが広く社会に向けて聞かれるようになってきた。その語りには、病いに対処する当事者の創意工夫や生活の知恵が含まれており、精神的不調にある子どもたちの生きる力を育成する可能性がある（栄 2013）。加えて、語りを聞いた子どもたちの精神障害者に対する好ましい意識変容を回路として、語りを行った当事者にもエンパワメントがみられたことが報告されている（栄 2017）。このような語り手と聞き手の双方に有効的な効果をもたらす福祉教育のプログラムは、多様性を認め合う地域共生社会の実現の可能性があることから、そのプログラム化が求められている。その際、福祉教育プログラムの伝達可能性を考慮し、ヒューマンライブラリーなどの手法を活用した場づくりや教材づくりもあわせて作成することが望まれる。

(2) 精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムの普及システムの構築の必要性

次に、発案した「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラム」の普及を目指して、そのシステム構築の必要性がある。その際、福祉教育の推進には、精神保健福祉領域、教育領域、地域福祉領域といった多領域による協同実践が求められることから、その成果を俯瞰的に提示する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神障害当事者による病いの経験に基づく語りの独自性を生かした福祉教育プログラムの開発とその普及システムの構築を提示することにある。そこで、本研究では福祉教育プログラムの開発に際して、ロジックモデルを作成することにした。その採用理由は、このモデルが原因と結果の連鎖関係を可視化するモデルであり、プログラムの設計上の欠陥や問題点の発見、インパクト評価等における自己評価が明確になるという特徴があることによる。

3. 研究の方法

本研究の前段階として、筆者は連携研究者とともに先駆的に精神障害当事者の語りを生かした福祉教育を実践している団体を対象（2006～2014年）にアクションリサーチの方法を用いて参与観察を行い、効果的なプログラム理論を抽出しながら、そのモデルを開発してきた（栄・清水 2014）。そのモデルを素案として、より効果的な福祉教育プログラムの生成を目指して、本研究の趣旨に賛同の得られた5つの団体や組織にメンバーの一員として入り込みながら、各々の団体や組織の実践上の創意工夫や取り組み等に着目した。本研究の開始年度である2015年度からは当事者の語りを生かした福祉教育の実践を循環的に繰り返しながら、より良い成果が得られるプログラムの精緻化を図ってきた。2018年度は福祉教育の推進者をはじめ団体や組織の構成員にロジックモデルとともにプログラムの普及システムの方策について提言した。

倫理的配慮として、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の実践団体や組織に対して、本研究の趣旨を説明し、調査協力の同意を得たうえでアクションリサーチを行った。本研究は、大阪市立大学大学院倫理委員会による承認を得て実施した（承認番号 15-06）。

4. 研究成果

(1) 「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育」の構造

本研究において、語りの聞き手である子どもたちの精神障害者に対する偏見の低減や自らのメンタルヘルスへの関心の向上がみられた精神障害当事者の語りとは、自身のリカバリーの物語と共生社会の協働を願うメッセージで構成されていた。授業案として、導入（アイスブレイク） ワーク（共学） 当事者語り（共生） クロージング、という構成が有効的だった。

(2) 「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデルの作成

(1) をふまえ、「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデルを示す。ロジックモデルは、個々の団体・組織の実践によってもたらされる一連の効果の因果関係の流れを示したプロセス理論とインパクト理論で構成され、一般的に、投入 (Input)、活動 (Activity)、結果 (Output)、成果 (Outcome) という要素がある (Rossi, Lipsey & Freeman 2004)。本研究に協力が得られた5つの実践団体や組織には、いずれも活動をマネジメントする「事務局」が存在した。以下、事務局の種別と活動動機を示す (表1)。

表1 福祉教育の好実践事例とした5つの団体・組織の事務局と活動の動機・開始年・活動の目標

団体：事務局	福祉教育活動の動機・開始年・活動の目標
A：NPO 法人	施設コンフリクトを機に2006年開始。目標：障害者が当たり前に暮らせる地域づくり
B：社会福祉法人	施設コンフリクトを機に2011年開始。目標：共学共生・施設コンフリクトのない社会
C：保健所	障害者総合支援法を機に2011年開始。目標：市民のメンタルヘルスリテラシーと当事者のリカバリー
D：家族会	家族会の要望を機に2011年開始。目標：こころの不調を抱える子どもたちの権利行使
E：社会福祉協議会	精神保健を題材とする福祉教育の必要性を機に2015年開始。目標：共生社会の実現

本福祉教育プログラムのロジックモデルの試案を提示すると、次のようになる (図1)。

「投入」される資源として、ヒト (人/チーム)：語りをする当事者 (家族)、推進者 (精神保健福祉・地域福祉・教育などの関連者)、モノ：事務局・会議 (準備：当事者による語りの生成と教育機関との打ち合わせ、授業の開催：チームによる語りの実施、授業：省察と記録)、福祉教育教材、啓発用パンフレット、カネ (資金)：活動費 (事業費等)・教材費 (リーフレットの作成費等)、啓発費等がある。「活動」とは投入をもとに実際に行われる活動のことであり、語り部養成研修と現任者研修の準備・実施・省察 (記録)、語りを生かした授業の企画・運営・授業準備実施、省察 (記録)、教育機関 (聞き手：学校の児童・生徒)、実施校と授業の打ち合わせ、アンケート実施、教材の作成・印刷・配布先の調整と配布、語りを生かした教育の広報に伴うリーフレットの作成・印刷・それをを用いた活動の広報、活動費の確保、活動報告、成果報告、教育行政への要望書・施策提言等がある。これらの活動の「結果」は、「当事者の語りの生成」とそれを活用した「精神障害当事者のリカバリーの物語を生かした福祉教育の実施」であり、「小学校・中学校・高校に在籍する子どもたちや教職員」が参加利用する。

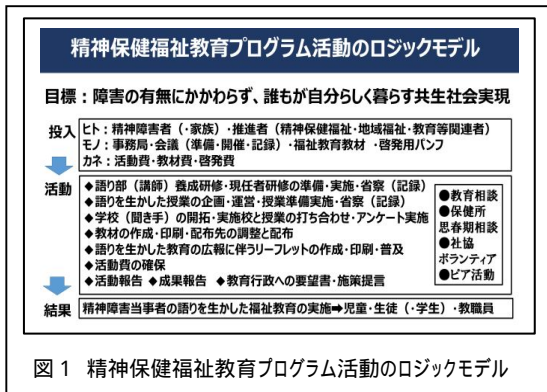


図1 精神保健福祉教育プログラム活動のロジックモデル

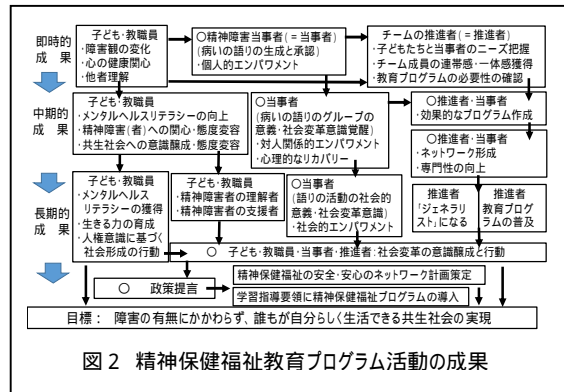


図2 精神保健福祉教育プログラム活動の成果

以上の活動の「成果 (アウトカム)」として、即時的成果は「当事者の語りを聞いた子どもたちの障害観の変化・自己の心の健康への関心・他者理解」「語りを行った当事者のエンパワメント」「子どもたちと当事者のニーズ把握」「チーム成員の連帯感・一体感獲得・教育プログラムの必要性の確認」があり、中期的成果は「子どもたちのメンタルヘルスリテラシーの向上、精神障害(者)への関心・態度変容、共生社会への意識醸成・態度変容」「当事者の対人関係的なエンパワメント、心理的なりカバリー」「チーム構成員による効果的な福祉教育プログラムの作成と地域のネットワーク形成、専門性の向上」、長期的成果として「子どもたちの生きる力の育

成と人権意識に基づく社会形成の行動」「子どもと教職員の精神障害者の理解者支援者」「当事者の社会的エンパワメント」「推進者の『ジェネラリスト』になる、教育プログラムの普及」「全ての関与者の社会変革の意識醸成と行動」があり、「政策提言」「精神保健福祉の安全・安心のネットワーク計画策定」「学習指導要領に精神保健福祉プログラムの導入」を経て、「障害の有無にかかわらず、誰もが自分らしく生活できる共生社会の実現」がある（図2）。

（3）「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラム」の普及システムの構築

上記に示した「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラム」が普及されるシステムとして、二つの方策が考えられる。一つは信頼関係を基盤としながら理に適った形でプログラムの趣旨の承認者や理解者を増やす「結束型」、もう一つは市場原理に基づき不特定多数の人々にプログラムを周知し、そのプログラムに関心を寄せた人々から承認者や理解者を増やす「架橋型」がある。今後は、双方の利点を生かした普及システムの構築が望まれる。

（4）本研究の意義

本研究の意義は、次の3点にある。第1点は、従来の福祉教育プログラムの報告は単一の実践報告が多いものの、本研究は同様の目標を掲げながら実施主体の異なる福祉教育プログラムを分析対象としたことから、より効果的な実践プログラムの要素の提示に寄与できる点にある。第2点は、福祉教育プログラムには複数の人々が登場し、「精神障害当事者の語りを生かした福祉教育」には、精神保健福祉領域の専門職に加え、精神障害当事者と教育関係者の存在が重要なステークホルダーであることを提示した点である。第3点は、福祉教育の目標に「地域共生社会の実現」という抽象的な目標が掲げられることが多いものの、即時的成果や中期的成果を示すことで、より具体的なプログラム評価が可能となる点がある。

<引用文献>

- Rossi, P. H., Lipsey, M. W. & Freeman, H. E., Evaluation : A Systematic Approach 7th ed. : Sage Publications, 2004. (= 大島巖ほか監訳、プログラム評価の理論と方法：システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド、日本評論社、2005.)
- 栄セツコ、精神障害当事者が参画した中学生に対する福祉教育、日本福祉教育・ボランティア学習学会紀要、22巻、2013、35-47 .
- 栄セツコ、公共の場の語りによる精神障害当事者のエンパワメントの獲得過程とその特徴、コア・エシックス、13巻、2017、73-85 .
- 栄セツコ・清水由香、中高生を対象とした精神保健福祉教育プログラムの開発～精神障害当事者の語りから学ぶ～、日本学術振興会科学研究費助成報告書、2014 .

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

- 栄セツコ、自助と自治支援の視点から 病いの語りがもつ力の効用に着目して、精神医学、査読無(依頼論文) 61巻4号、2019、423-431 .
- 栄セツコ、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の実践的枠組みに関する研究、地域ケア、査読無(依頼論文) 21巻1号、2018、52-55 .
- 栄セツコ、病いの語りによる「つながり」再考；自己とつながり、仲間とつながり、そして未来とつながる語りの活動、精神保健福祉、査読無(依頼論文) 49巻2号、2018、73-85 .
- 栄セツコ、公共の場の語りによる精神障害当事者のエンパワメントの獲得過程とその特徴、コア・エシックス、査読有、13巻、2017、73-85 .
- 栄セツコ、リカバリーを促進するピアサポートの人材育成、精神障害とりハビリテーショ

ン、査読無（依頼論文）、20 巻 2 号、2016、128-132 .

栄セツコ、精神障害当事者の語りをもたらす社会変革の可能性、コア・エシックス、査読有、12 巻、2016、89-101 .

栄セツコ、精神障害者にエンパワメントをもたらす公共の語りの場の設計—語り部グループ「ぴあの」の実践事例をもとに—、コア・エシックス、査読有、11 巻、2015、83-94 .

〔学会発表〕(計 11 件)

学会発表 (7 件)

栄セツコ・清水由香、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育活動に関するプログラム評価～福祉教育活動の推進者にもたらすアウトカムとは～、第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会東京大会、2018 .

久下明美・松永貴久美・栄セツコ、思春期精神保健福祉教育の学校への普及に向けた実践と課題、第 22 回日本精神保健・予防学会、2018 .

木下隆志・栄セツコ、精神保健福祉教材による授業効果の検証—当事者・保護者・教職員による精神保健福祉教育の協同実践—、日本社会福祉学会第 66 回秋季大会、2018 .

栄セツコ・清水由香、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムのロジックモデルの試案 - 実施主体が異なる 5 つの団体による福祉教育プログラムの実践から -、日本社会福祉学会第 66 回秋季大会、2018 .

栄セツコ・清水由香、公共の場における語りのジレンマ リカバリーの物語のシナリオは誰がかくのか、第 25 回日本精神障害者リハビリテーション学会久留米大会、2017 .

栄セツコ・清水由香、精神障害当事者の語りをもたらす社会変革の可能性、第 24 回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会、2016 .

栄セツコ・清水由香・芦田邦子、精神障害者にエンパワメントをもたらす公共の語りの設計、第 23 回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会、2015 .

自主企画 (計 4 件)

船越明子・栄セツコ・増川ねてる、ワールド・カフェ：当事者の『語り』が生まれる未来～メンタルヘルスの未来を語り、未来を創造しよう～、第 23 回日本精神障害者リハビリテーション学会、2018 .

船越明子・栄セツコ・増川ねてる、ワールド・カフェ：当事者の『語り』が生まれる未来～メンタルヘルスの未来を語り、未来を創造しよう～、第 24 回日本精神障害者リハビリテーション学会、2017 .

船越明子・栄セツコ・増川ねてる、ワールド・カフェ：当事者の『語り』が生まれる未来～メンタルヘルスの未来を語り、未来を創造しよう～、第 25 回日本精神障害者リハビリテーション学会、2016 .

船越明子・栄セツコ・増川ねてる、ワールド・カフェ：当事者の『語り』が生まれる未来～メンタルヘルスの未来を語り、未来を創造しよう～、第 26 回日本精神障害者リハビリテーション学会、2015 .

〔図書〕(計 2 件)

栄セツコ、金剛出版、病いの語りによるソーシャルワーク エンパワメント実践を超えて、2018、全 237 ページ .

栄セツコ、やどかり出版、こころの病いの物語をつむぐ 学校における語り部活動、2015、

[その他](計 5 件)

報告書 (計 4 件)

栄セツコ編、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究、2018、全 61 ページ .

栄セツコ編、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究、2017、全 104 ページ .

栄セツコ編、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究、2016、全 84 ページ .

栄セツコ編、精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の普及に向けたシステム構築に関する研究、2015、全 95 ページ .

冊子 (計 1 件)

栄セツコ編、病いの語りから学ぶ 私の物語・あなたの物語・ヒューマンライブラリー、2019、全 15 ページ .

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年 :

国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年 :

国内外の別 :

6 . 研究組織

(1) 連携研究者

清水 由香 (SHIMIZU, Yuka)

大阪市立大学大学院・生活科学研究科・助教 : 研究者番号 90336793

船越 明子 (FUNAKOSHI Akiko)

兵庫県立大学・精神看護学・准教授 : 研究者番号 20516041

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。